

【冬の企画展】

(R3. 1. 15～3. 14)

くろご 黒衣に徹した姉と弟

《併催》シリーズ後藤新平人脈考③「菊池忠三郎」

《黒衣として後藤新平を支え続けた姉と弟》

新平が生まれたとき11歳。椎名辨七郎に嫁ぐ。25歳頃、夫とともに北海道に渡る。さんざん苦勞した初勢は、故郷に戻ったあと離婚する決意でいたが、婚家の姑が非常に初勢を気に入っており、たとえ辨七郎を勸当しても、死に水はお前にとってもらわねばならぬと、離婚を許してくれなかったので、籍は椎名家においたまま、後藤家に帰った。

【姉「初勢」】



初勢から和子へ



明治16(1883)年1月、父の死去にともない、3月に母・利恵と東京へ移住、新平とともに暮らすこととなった。37歳頃、新平がドイツ留学中は、女学校の舎監を務め、裁縫も教えていて、独立した生活を送っていた。また、常に母と新平夫妻の間の防火壁となり、和子夫人も頼りになる義姉に何でも相談した。安場家の子どもたちも、叔母さん〔和子夫人〕のおばさんという意味で「もつとおばさん」と呼んで慕った。小柄ではあったが、強い精神力を持った人で、誠実で善良な性格は接する人を魅了してやまなかった。「後藤の姉がもし男だったら、後藤以上の人物になっていたであろう」とも言われた。夫との間に子どもがいなかったため、後藤家遠縁の椎名悦三郎を養子とした。

【弟「彦七」】



新平とは8歳違い。新平が須賀川の医学生時代に最も好んで読んだ本として『西国立志編』があるが、この本が発行された際、新平は2冊購入し、そのうち1冊を郷里の彦七に送っている。また、名古屋時代、父に送った手紙の中で、「勉学に勤めるようお伝えください」と記し、弟の勉学のことを常に心配していた。

明治12(1879)年、父母と一緒に名古屋の新平を訪れた際、父母が帰郷してからも新平のもとに残りその養育を受けた。漢学の師のもとで学んだ後、名古屋の師範学校へ入学している。明治16(1883)年1月、18歳のときに父・実崇が死去、多忙であった新平の代理として帰郷している。20歳の頃には東京大学予備門へ通っていた。新平がドイツへ留学している間、福岡・安場家の世話になっていた母・利恵が水沢へ帰りたいたってちょっとした波乱が起こった際、和子夫人の助けとなり、現地へ行っては、姉とともに母をなだめたという。新平が相馬事件により入獄した際には、新平の片腕となり借財等の整理に尽力した。字が上手く、挨拶原稿の執筆を行うなど、後年は新平の秘書のようなことをしていた。のちに阿川家(新平の恩師・阿川光裕)の養子となり、その姓を名乗った。



彦七から新平へ

【シリーズ後藤新平人脈考③「菊池忠三郎」】

- 明治2(1869)年:水戸藩支藩石岡藩権大参事菊池慎七郎の三男として生まれる。
- 明治29(1896)年:東京帝国大学卒業後、横浜正金銀行に入社し、ロンドン支店等勤務。
- 明治41(1908)年4月:訪露の旅に上る後藤満鉄総裁に随行。
- 大正1(1912)年10月:後藤の台湾再遊に際し、下村当吉らと共に随行。桂太郎の死去直後、後藤の私邸に訪れる政客たちの密談の中で「大正未来記」を筆記。
- 大正4(1915)年9月:後藤の満鮮巡遊に中村是公と共に随行。翌年、後藤内相の秘書官となる。
- 昭和7(1932)年:後藤新平伯伝記編集会委員。昭和12(1937)年死去。68歳

【新平の隣が忠三郎】



企画展では、各種書簡に加え、姉弟が入った家族写真や水沢小学校創立50年の彦七筆跡原稿、伯爵陞爵祝賀晩餐会の彦七浄書原稿・斎藤實の名前も見える席次等を展示しています。

令和二年度 冬の企画展

くろご 黒衣に徹した姉と弟

【併催】シリーズ後藤新平人脈考③「菊池忠三郎」

【開催期間】令和3年1月15日(金)～3月14日(日)  
奥州市立後藤新平記念館